

オーナーblog 第12話 「訪問診療で“いくせい流”を試す」(2024.1.6.)

末期がん・超高齢者・難病の患者さんに対して、「有るものを活かす」「天賦の才を開花させる」姿勢で対応している。いくせい流とは、観察・データ分析・相手の立場に立って、自分の能力を投影させる。つまり、「私ならこの様にしてみる」試行と観察を、安全に気を付けながら繰り返す交流である。

最初にしたことは、相当に体力を使い、とんでもなく心身が消耗することである。始めて4か月目であるが、半数以上の人に何かしらの変化が認められた。例えば、50代のがん患者さんの心が開いて笑顔での会話が認められている。このケースは、専門医に言えないことを家庭医の私が情報提供して仲介したことだ。排尿カテーテルが繰り返して詰まり、腰痛で苦しめられていた。管理は専門医だが何もしてくれない？ カテーテル径を大きくすることで解決できるかも知れないと考察して、本人に説明して情報提供してあげた。その後、痛みは軽減した。発熱を繰り返していた超高齢者には、その原因と対策を徹底した。痰と尿の細菌培養を実施、原因菌を同定して、有効な抗生物質をスタッフと情報共有した。そして、細菌が体から排出しやすいような水の流れを再考した。水分摂取量（胃ろうや点滴）を増量＋カテーテル留置で膀胱の細菌繁殖対策＋投薬（利尿剤・去痰薬・消化酵素・漢方薬）で静菌を促した。その後、高熱になる頻度は減ってきた。

このように、一人一人の患者さんの有るものを活かす観察をしていくと、次々に、解決までいかなくとも改善につながる方法が観えてくる。しかし、塾も同様だが、上位校に進学しても不適応を起こした事例を数多く経験してきた。その後の目的が曖昧なのである。

長生きしても、「ただ生きている」だけの場合、再度衰弱していく“流れ”となる。